

検討用シートのキーワード整理

基本的な理念として押さえておきたい点 (P2)	I 繋がり、地域社会	II 自然、水、みどり
	III まちへの誇り、愛着、ふるさと	IV 文化、学園都市
	V 一人ひとり、多様性	VI 持続可能
	VII 技術革新	VIII 安全、安心

(仮称)小平市第四次長期総合計画期間中にめざす将来像(ビジョン)のイメージ (P3)	I 地域資源、交流	II 発展、活力
	III 自然、水、みどり	IV 認めあい、支えあい、助けあい
	V 子ども、若者	VI 繋がり

将来像を実現するための取組の方向性	ひとづくり (P4)	<ul style="list-style-type: none"> 子ども、若者（子育て支援、中高大学生の交流、学生や若者の知恵と行動力を活かす仕組み） 学び（学校教育、英語教育、多文化共生、生涯学習、地域と学校、図書館、情報科学技術の活用） 健康、スポーツ（一人ひとりの健康、超高齢社会、市民活動によるスポーツ振興） 地域共生社会 ・市民活動
	くらしづくり (P6)	<ul style="list-style-type: none"> 安全、安心（災害対策、異常気象、自主防災組織、自助共助、具体的行動指針） 地域コミュニティ（居場所、世代間交流、市民活動、地域自治） 地域共生社会（見守り、支えあい助けあい、生活支援コーディネーター、地域包括ケアシステム、シニア層の活躍） 男女共同参画等（人権、能力と個性、DV、相談支援、働き方、セクシャルマイノリティ）
	まちづくり (P7)	<ul style="list-style-type: none"> 水、みどり、環境（みどりの目標立て、みどりの維持管理、自然との調和） 都市基盤整備（再開発事業、防災・減災、利便性、集客、交通安全、道路と歩道、地域資源との連携） 農業、商業（農地の相続、地産地消、商店街活性化、拠点と周辺エリアの連携） 文化、観光（津田梅子、ブランド化、域外発信、文化財）
	行財政運営 (P9)	<ul style="list-style-type: none"> 多様な主体との協働、連携（協働事業、広域連携、公（官）民連携、きっかけづくり、後押し、協働・連携の総指揮） 情報発信、情報共有（必要な情報、分かりやすい伝え方、正しい理解） スマート社会（最先端技術） 財政基盤（企業誘致、転入増となる制度） 行政組織 ・業務の棚卸 ・メリハリ ・変化への対応

■基本的な理念として押さえておきたい点に関する委員の意見

視点Ⅰ 繋がり、地域社会
<ul style="list-style-type: none">・人口（労働人口）の減少、活力の減少が想定される。将来に向けて安全安心を前提に住民同士の支えあい、質の高い豊かなまちが欲しい。単なる利便性の追求は望まない。・いきいきとした市民生活を通して豊かな地域社会を築く。 ・繋がり。・地域社会に自分自身がどのように貢献できるか、ということが日々増していく。孤立、孤独感を払拭するものと思う。・市民、行政、市民一人ひとりが地域で結び、コミュニティを育てながらいきいきとしたまちをつくる。・障がい者、子育て世代、高齢者など老若男女が互いに助けあい住みやすいまち。・市民が主役であり、「市民自治」の積極参加を幅広く推進する。（DIY文化醸成、事例共有）
視点Ⅱ 自然、水、みどり
<ul style="list-style-type: none">・「水とみどり豊かな」は変わらぬよいところ。 ・水とみどりの豊かなまち。 ・みどり。・水とみどりを守り、安心して住むことができるまち。・水とみどりを活かした魅力あるまち。
視点Ⅲ まちへの誇り、愛着、ふるさと
<ul style="list-style-type: none">・住むことが誇りに思えるまち。 ・住むことが誇れるまち。・「この地が『いい郷』であり続けること」は優しい響きがありよい。
視点Ⅳ 文化、学園都市
<ul style="list-style-type: none">・くらしと仕事と学びと文化の調和のとれたまち。 ・住宅都市＋学園都市。・大学や大学校との協働による若さと活気あふれるまち。
視点Ⅴ 一人ひとり、多様性
<ul style="list-style-type: none">・「人権」「多様性」…一人ひとりの多様性を認めあい、ソーシャル・インクルージョンの理念のもとに、差別や暴力のない、平和なまちづくりをめざす。・多様性の容認、多様な価値観の尊重、インクルージョン、認め合い。・市民のボランティア参加による交流、世代や性別、国籍や人種の境界をなくすこと。
視点Ⅵ 持続可能
<ul style="list-style-type: none">・将来に希望の持てる社会。 ・SDGs（持続可能な開発目標）。・土地の歴史を大切にしつつ（江戸からの文脈）、変化に柔軟に対応する。（地球環境、技術革新）
視点Ⅶ 技術革新
<ul style="list-style-type: none">・ICT。 ・IT技術や最新テクノロジーもふまえた循環型経済社会の推進に取り組むこと。
視点Ⅷ 安全、安心
<p>・今回の台風19号の記録的な大雨により、長野市の千曲川をはじめ、宮城県、福島県、栃木県、埼玉県等、広域にわたっての河川の堤防決壊や神奈川県箱根町での48時間に1,000ミリを超える豪雨など、大規模な浸水被害に見舞われた。今回の台風19号は、日本に近づくまでの間猛烈な勢力として、今後同レベルか、さらに強い台風が日本を襲う危険性を専門家が指摘している。その根拠として「海水の温度が高く、エネルギーとなる水蒸気が大量に供給された」とする地球温暖化の影響がある。こうした自然災害に対して、想定外を想定しての事前の備えの難しさと対策の重要性を痛感した。このことから、今後のまちづくりの基本的な理念として押さえておかなければならない重要な視点の一つとして、「安全・安心」（人が住み、暮らし続けるための最も大切な基盤となるべきもの）と考える。</p>
その他（基本的な理念を検討する前提として）
<ul style="list-style-type: none">・市民と行政、若い世代と高齢世代がまちづくりの姿勢を大切にしていくことはよい。・人口が約20万人いるのに、職場参加や市民参加等市民が皆でまちづくりに取り組んでいる感がある。手作り感を計画に出せないか。・都や近隣自治体の文脈に沿い、市内だけのせまい視野にならず、広域で検討する。

■（仮称）小平市第四次長期総合計画期間中にめざす将来像（ビジョン）のイメージに関する委員の意見

視点Ⅰ 地域資源、交流
<ul style="list-style-type: none">・大手企業の研究施設や高校・大学なども多い中、市内の施設との連携を図る等教育力の向上や文化、教養の充実を望みたい。・文化都市の要素の一つとして、「津田梅子ゆかりの地」を入れてほしい。・賑わい拠点のあるまち。 ・世代間交流が自然にできるまち。・地域資源を活用し、安全・安心なまちをめざす。
視点Ⅱ 発展、活力
<ul style="list-style-type: none">・地域で働く場が増えること。（プチ田舎ならぬ、プチ起業創業、コミュニティビジネスが気軽に行えるまち。）・小平市や近隣地域が抱える地域課題や社会課題をテクノロジーの発展（5G、Society5.0など）が解決することで小平市の地域資源が付加価値を有し、市が持続する活力となるのではないかと考える。・田舎というイメージよりも、発展や開発といった利便性と、繋がりや自然という側面からなる新しい都市像。・デジタル革命による破壊的イノベーションがすべての産業、生活様式等に影響を及ぼす。今後、高度な技術革新に伴い、5G、IoT、AI、ビッグデータなど、あらゆる活動がデータ化され、ネットワークで連携するとともに、データ分析により、新たなサービスや情報に価値が生まれる時代へと変革するものと考えられる。・外国からの観光客の増だけではなく、外国人労働者（技術者）の受け入れ体制も含め増大。（生産年齢人口（労働者）の確保（国策））
視点Ⅲ 自然、水、みどり
<ul style="list-style-type: none">・みどり豊かなまち。 ・水とみどりを感じるまち・玉川上水や用水の緑道と生産緑地の保全。 ・環境にやさしいまち。
視点Ⅳ 認めあい、支えあい、助けあい
<ul style="list-style-type: none">・健康と福祉のまち。 ・歩いて健康になるまち・「繋がり」「支え合い助け合い」…ダイバーシティ&インクルージョン。多様な人と人が共に支え合い、生きやすい社会をめざす。誰もが社会に参加する。・孤立、孤独がなく、お互いに助けあうまち。
視点Ⅴ 子ども、若者
<ul style="list-style-type: none">・若い（結婚、子育て）世代の希望を叶えるまち。 ・子育て世代に魅力あるまち。・「子ども・若者」…健やかな成長。子育てしやすいまちづくり。切れ目のない子育て支援。
視点Ⅱ 繋がり
<ul style="list-style-type: none">・人や地域の繋がり。 ・市民の力を活かせるまち。
その他（将来像を検討する前提として）
<ul style="list-style-type: none">・資料3にある市民ワークショップのグループAからGのキャッチフレーズはどれもよい。そのキーワードが具体的な数値なり指標なりを伴っていればなおよい。地域の繋がり、みどり豊かな、住みやすい、子育てできる、全世代がほっとする、市民と行政が一体というキーワードがさらに説明力を持つとよい。・イメージしやすい具体的な表現を使うことを検討すべき。 ・住むことが誇れるまち。・急速な少子化と超高齢社会であり、人口減少社会に向かう。・高齢化する中で、どのような人生の送り方（あり方）を考え、その方向に向けての基礎作り期間で、今までの老人という感覚を超えて考える必要がある。・抽象的すぎると心に響かず、将来像がイメージできない。小平の歴史や特徴に応じたフレーズをピンポイントで入れることが望ましい。【例1】プチ田舎→「いつか、誰かの、ふるさとになる」、「ずっと住みたくなるまち、いつでも帰りたくなるまち」、「ふとした瞬間に思い出す」、「このまちを、ふるさとにする」【例2】市民活動→「誰かの“あれやりたい”を応援する」【例3】まちの成り立ち→「農でうまれたまち、新たな開拓のはじまり」、玉川上水や用水路網、鈴木遺跡など「水とみどり」の遺産に関わるもの等。

■将来像を実現するための取組の方向性に関する委員の意見（ひとづくりの分野）

視点Ⅰ 子ども、若者

- ・「子ども、若者」に焦点をあてることはよい。
- ・愛着形成や自尊心を育む乳幼児期に母親を支援することが大切。
- ・子育て世帯が孤立しないように地域との関わりを促す。 ・子育てを応援するまちづくり。
- ・安心して子どもを産み育てられるまち。 ・核家族、シングル家族へのサポート強化。
- ・父親学級や孫育て講座などを開催し、地域全体で子育てを支えることの大切さを広める。
- ・未来（次世代）の担い手である子どもたちへの子育て支援と教育環境の整備、充実。
- ・子育て支援については、共働きやひとり親世帯の増大に対する施策として「待機児童解消策」が重要な課題である。
- ・子育て支援の観点からは、保育園などのハードの整備だけではなく、保育のクオリティが求められている。保育士やアドバイザー、カウンセラーなどの人員・質の確保といったソフト面の充実。
- ・まずは子どもとその親への支援（制度や場など）と、次いでその世代と高齢者が交流できるような取組がよいと思う。
- ・市内、近隣に多数ある大学の学生さんたちと中高生とのテーマを持った交流の場づくり。
- ・学生や若い人の知恵と行動力を活かす仕組みづくり。（小平のひと・くらし・まちづくりに取り組みたい若い世代を応援する仕組みづくり。【例 1】若い世代が期待する駅前拠点のあり方を議論する市民活動の立ち上げ。【例 2】若い世代に駅前拠点の商業設置運営を任せるスペースの提供など。）

視点Ⅱ 学び

- ・AI 対応や生涯学習について焦点をあてることは高齢者対応にもつながる。
- ・技術革新の視点から、子どもたちの学びを支え、未来を創る教育 ICT の推進。（タブレットの活用等。）
- ・教育現場への地域住民や学生の参画（補助、特別授業、クラブ活動）。
- ・学校の地域の居場所化。
- ・グローバル化の視点から、英語教育推進の一環として学校を拠点とした国際交流の推進。（ダイバーシティ & インクルージョン教育（多様な人材を受け入れる。）の推進にも結びつく。
- ・他の地域、国の人達と市民の交流の場を増やし、多様な価値観の存在を学べるようにする。
- ・まちを想い、地域や隣人に想いを馳せることができる人が欲しい。（教育に期待。）
- ・アンガーマネジメントの学習の機会をつくる。
- ・子育て支援から高齢者福祉までの生涯学習の推進、生涯スポーツの推進。
- ・小平市の図書館は近隣市の方から充実しているという評価がある。
- ・図書館は全ての年齢層が学べる、また余暇を楽しむところとして、幼児と母親、学生の学習室、ほっとできるスペースなど使い勝手を考えた、利便性のある図書館になることを希望する。（図書館と公民館の一体化も考えられる。）
- ・現在の箱物建築から特色ある建造物（奇をてらう物を希望しているのではない）が、小平市の特色の一つになるとよい。

視点Ⅲ 健康、スポーツ

- ・「健康、スポーツ」に焦点をあてることもよい。
- ・ひとづくりは、何よりもまず一人ひとりの健康から。
- ・課題として「超高齢社会に向けて、福祉、医療、介護の充実」。
- ・FC 東京の応援を通じたスポーツへの取組活性化。（例えば小平グラウンド等の来場者を増やす取組を行う市民活動の立ち上げ。）

資料 5 の（想定される内容）以外の視点

- ・庁内認識は総花的だがよいこと。
- ・未来がいきいきと明るく希望ある福祉とは、全ての人々が支えあい、互いに助けあい、いきいきと繋がりを大切にした「地域の共生社会」の形成ではないか。
- ・いきいきと健康に、人と人との繋がりを大切にした福祉のまちづくり。
- ・子ども、若者、大人、老人各世代の価値観を理解し、その上、人が永続的に住むことができる環境の整備が必要。

- 市民活動を通じた“ひとづくり”の視点。(市民活動支援センターあすぴあとの協賛。)
- 生産年齢人口の地域参加の推進(プロボノ推進、社会活動へのボランティア参加の敷居を下げる)として、生涯を通じたリカレントな「学び」と「遊び」と「表現」の三位一体要素が重要である。公民館や大学を中心とした時流を捉えた市民講座の開設や、NPO や市民活動団体が主催するイベントの積極的支援(公園や公共施設の積極活用)、個人の「あれやりたい」を応援する仕組みにより、「学びたい」、「参加したい」と思える施策が必要。

■将来像を実現するための取組の方向性に関する委員の意見（くらしづくりの分野）

視点Ⅰ 安全、安心

- ・災害対策。
- ・「安全、安心」については、昨今の異常気象、災害多発に対応して、武蔵野台地という点等から、災害に強いことをアピールできないか。
- ・自治会加入率が3割、4割と言われている中、自主防災組織（訓練）の必要性を考えると、地域を巻き込んだ小学校区の防災組織（訓練）を推進させてはどうか。
- ・地域防災訓練の強化。（南海トラフ被災者受け入れ。）
- ・安全、安心なまちづくりのためにも自助共助の努力が必要。
- ・防火、防災を具体的に示すこと。自然災害については具体的行動指針を設けることが重要。特に最近は大災害が巨大化している。

視点Ⅱ 地域コミュニティ

- ・居場所の重要性が言われている。仕事、学校、家だけではない「場」がたくさんあるほど心が安らぎ、活力もわいてくる。くらしには「あそび」が必要。
- ・市民活動の持続と活性化を支援する。
- ・地域での互助による世代間交流。
- ・地域自治の中で地域課題に取り組んでいく。地域自治の事例共有と推進が望まれる。2019年に鷹の台エリアで立ち上がった「ひとえん会」のように、複数の町会、自治会をまたぐ地区単位において、地域の力で地域を担う、地域自治が芽生えている。都市計画マスタープランの地域別構想で計画する地域や鉄道周辺地区の取り組み事例を共有することで、計画外地区での地域自治の形成を促進することが望ましい。

視点Ⅲ 地域共生社会

- ・子ども、高齢者を家に引きこもらせない。
- ・地域共生社会の着実な実現。（できる限り助けあい、支えあうこと。）
- ・地域共生社会の実現のために現在取り組んでいる居場所づくりが、各包括支援センターの生活支援コーディネーター（SC）などの働きで市内50カ所となっている。第3層も視野に入れた地域づくりが進められている。
- ・地域包括ケアシステムの深化。
- ・人生100年時代に合わせたシニア層の活躍の場の確保。（60歳から100歳までの40年間の生活は一樣ではないはず。）

視点Ⅳ 男女共同参画等

- ・他の公共団体との差別化（図る必要があるかはおいたおいて）をするなら、男女共同参画を事由にして誰にも優しい政策かつ革新的なものがよいと思う。
- ・性別役割分担意識に左右されることなく、一人ひとりが尊重され、能力と個性を發揮できる男女共同参画社会を目指す。
- ・配偶者からの暴力や交際相手からの暴力の防止について、啓発活動を行い、相談支援を充実させる。
- ・男女ともに子育てや介護、仕事の両立（ワーク・ライフ・バランス）を図る。
- ・セクシャルマイノリティについて学習する機会を作り、差別・偏見をなくす。
- ・子育て世代の女性、シニア層、副業・複業など多様な働き方を可能にする場の創出。

資料5の（想定される内容）以外の視点

- ・「人生100年時代」、「ワークライフバランス改革」、「教育の無償化」等に対応する観点から、小平のよい点をあげていったらどうか。
- ・市民が小平を歩きめぐる取組（スタンプラリー等）の活性化。（市民の健康維持＋小平のイメージアップ。市外からの集客を狙った情報発信に努める。）
- ・豊かな自然（みどり）から、また日々のくらしの中から生まれる生活文化。こうした文化を大切に育み、さらには新たな文化へと進んでいく「創意ある生活文化」が生み続けられるまちづくり、くらしづくりが大切と考える。
- ・豊かな自然（みどり）を大切に、新たな文化（アートのまちも含め）を生み続けるまちづくり。

■将来像を実現するための取組の方向性に関する委員の意見（まちづくりの分野）

視点Ⅰ 水、みどり、環境

- ・「プチ田舎」の言葉にはいろいろな意味が混在している。みどり一つとっても「都市農業」、「公園等のみどり」「地球環境保護のための樹木の保存」などなど。どれをどのくらいめざすのか、ある程度の目標立ては必要。
- ・みどりの維持管理。 ・豊かな自然と調和した環境にやさしい魅力あるまちづくり。

視点Ⅱ 都市基盤整備

- ・都市整備事業。 ・安全で利便性の高い都市基盤の整備。
- ・駅を拠点とする利便性の高い生活圏の形成。（小川駅、小平駅前再開発を意識して。）
- ・小川駅を利用している人々を取り入れた魅力的で便利な開発を早急を実現してほしい。
- ・全国的に有名な小平霊園がある小平駅北口開発が早まるとよい。
- ・再開発事業によって人、物が集まってくること。
- ・利便性は駅前再開発を中心にメリハリのあるまちづくりがよい。（みどりや静かな住宅街を守りたい市民もいる。）
- ・都市化とみどりの共存を兼ね備えたまちづくり。
- ・災害を意識（安全、安心）した都市計画事業の早期の実現。
- ・安全、安心して住み続けられる災害に強い都市基盤の形成。（災害（防犯を含む）に強い都市基盤の形成は、単なるハード（インフラ整備）だけを意味するものではない。地域に住み、くらし、学び、働くすべての人と人との繋がりが重要であり、日常の仕事や生活の中で知り合いとなり、互いが協力して助け合う関係の構築（地域コミュニティ）が何よりも大切であると考え。地域防災力の向上…自助、共助、公助。）
- ・近年、大きな災害が頻発していることを念頭に、防災減災について行政も市民も再々検討する必要がある。
- ・交通安全意識の普及啓発の充実。（小平市は自転車事故が多い？） ・道路と歩道の整備。
- ・地域資源を大切に次の時代を見据えた都市基盤を整備するための都市再開発事業等。（観光資源、文化資源、商店街など様々な地域資源を結びつけながら市民、民間企業、行政が連携協力して都市再開発事業等を推進することにより地域経済の活性化（IT、業務・商業的機能等による経済的活力）のまちづくり（にぎわい）を創出する。この活力は市の財政支出にも多大な影響を及ぼすが、反面、市の税収の確保にも結びつく。都市再開発事業を通して、行政課題を解決する。）

視点Ⅳ 農業、商業

- ・農地の相続による宅地化防止。 ・緑地、農地が手入れされていること。 ・地産地消の継続。
- ・商店街の活性化。
- ・駅前拠点には商業施設、公共施設やみどりと憩いの空間を充実させる。駅前で飲食、買い物を楽しめる商業施設が集まる施策を整える。公共施設（市役所窓口、図書館、保育園など）を設けて（移転も含めて）、利便性を高める。駅前に、木陰でベンチ休憩できる緑陰空間を設けて、他都市駅前との差別化を図る。拠点エリアでは美観で歩きやすい歩道や電線地中化を推進する。周辺エリア（グリーンロード、ルネこだいら、小平霊園、津田梅子墓地、各大学、FC東京グラウンド、平櫛田中彫刻美術館、等）への来訪者の受け皿となる商店街などの充実。各拠点と周辺エリアはコミュニティバスで結び取組をより充実させる。この様な取組方針を明確にして、拠点エリアへの商業施設の誘致を図る。

視点Ⅴ 文化、観光

- ・「津田梅子」ゆかりの地であることと、まちづくり（津田塾大学の学園）、ひとづくり（女性活躍）、くらしづくりとを結びつけてアピールできないか。
- ・地域資源のブランド化、域外発信。
- ・文化財を保護、発展させることは、その地域の価値を高めて住みたいまちにする。

資料5の（想定される内容）以外の視点

- ・「水とみどり」、「都市インフラ」、「小平の魅力アップ（文化・観光）」等の観点から、良い施策を拾い出していくことはよいこと。
- ・小平ならではのSDGs、スマートシティ、ESG対応ができていない点を強調できないか。

- 地域課題や実施すべき施策は無数にあっても資源が限られるため、ビジョン実現のための重点施策を設け、市の予算をかけるところ、市民活動に大きく委ねるところを、切り分けて取り組んだ方が良い。(すでに実施済みかもしれないが、PRを含め、より理解されるよう。) また、市民＝住民票を持つ人だけではなく、間接的に外部から小平市に関わる団体や、民間事業者、学術機関、他の自治体等についても、積極的に協働していくための施策が必要。

■将来像を実現するための取組の方向性に関する委員の意見（行財政運営の分野）

視点Ⅰ 多様な主体との協働、連携

- ・協働事業の継続。 ・広域連携。 ・企業連携。
- ・必要なインフラ整備は欠かせないが、他はきっかけづくり、後押しに力を。
- ・官民連携。（民間に任せられることは任せる。）
- ・子育て家庭の支援施策としてフィンランドの「ネウポラ」のような、子ども家庭センターと子ども包括支援センターを行政の枠を超えた同施設、協働とすることが望ましいと思う。
- ・市民、行政、大学、企業など、多様な主体が、互いの得意分野を生かし、協力しながら地域課題に取り組んでいく。
- ・行政、市民団体、商工、情報科学技術、教育文化、社会福祉、観光等の複数領域をまたぐ総合ディレクション。

視点Ⅱ 情報発信、情報共有

- ・この世の中は情報が溢れている。自身にとって必要な情報を受けるにも、知識や能力が必要な時代となっている。知識や経験のない子どもでも、社会の変化についていきにくくなった高齢者でも、誰もが必要な情報、分かりやすい情報が手に入れられるようになって欲しい。常に、情報の発信側の工夫が必要。
- ・市民が主役を基本とするならば、施策展開の徹底的な「伝わる化」が必要。また、世の中の変化にすばやく対応するために、行政への提案や意見交換窓を常設することが望ましい。
- ・市民自治のために、個別実施計画の進捗や成果を伝えるプレゼン。（正しく伝わる市政。）

視点Ⅳ スマート社会

- ・IT 等技術革新に目を向け最先端技術の導入、活用。
- ・IT 機器などの利用による業務の効率化。

視点Ⅴ 財政基盤

- ・安定した財政基盤の確保。（活力、経済）
- ・財源確保のため、企業誘致、転入市民の増加の動機となる制度があって良いのでは。

資料５の（想定される内容）以外の視点

- ・論点整理の観点を取り入れて、小平市に着目した説得力のある具体的なアピールポイントを示せるとよい。
- ・小平市都市計画マスタープランの達成を目指した実行計画を明確にする。
- ・特に、若い世代（子育て世代）に応える駅前再開発をヒアリングして進める。
- ・職員が能力を発揮できる組織。女性管理職の割合は？
- ・グローバルな視点から施策を推進する組織の構築。
- ・持続可能な行財政運営（サステナブル（環境にも配慮した持続可能）の概念を大切にした運営。
- ・長期的視野に基づく業務の棚卸。
- ・部門間の業務の連携強化。（縦割り業務の排除。）
- ・協働事業提案や助成金の厳格化。
- ・「あれも、これも」ではなく、「あれか、これか」とメリハリをつけた行政を推進する
- ・地域がサービスを受ける限界値を知ること。それは各世代によって満たして当然のサービスとそうでないサービスを仕分けし、20万人市民のやるべき財政の指針は税収の限界値によるもの。
- ・変化に柔軟に素早く対応するために、提案受付窓口の設置や、年度途中いつでも申請できる提案型事業の予算化。